

# カナダ、ニューファンドランドおよびラブラドルにおける商業捕鯨の歴史

浜 口 尚

## 1. はじめに

カナダ、ニューファンドランドおよびラブラドルにおける近代型沿岸基地式捕鯨について、ディキンソンとサンガーが一連の著作を発表し (Dickinson and Sanger 2001; 2005)、その多くを知ることができるようになった。捕鯨文化の比較考察を研究テーマとする筆者にとってはうれしい限りである。

しかしながら、同地における日本企業の捕鯨事業については、極洋捕鯨と大洋漁業を混同するなどの不正確な箇所も見受けられる (e.g., Dickinson and Sanger 2005: 141)。彼らの著作の参考文献や謝辞を読む限り、日本側 (日本語) の資料は用いられていない。日本側資料の未利用が彼らの力作に一点の曇りを与えているのである。

幸いなことに筆者は日本語ができる (当たり前!)。以下、本稿においてはディキンソンとサンガーの著作に依拠しながら、日本側資料も併用してニューファンドランドおよびラブラドルにおける商業捕鯨の歴史を筆者なりに要約してみる。拙稿によって、読者各位に日本から遠く離れたカナダ大西洋岸に位置するニューファンドランドおよびラブラドルが捕鯨という産業を通して日本と近い関係にあったということを知っていただければ筆者としては幸甚である。

## 2. ニューファンドランドおよびラブラドル捕鯨前史

ニューファンドランドおよびラブラドルにおける商業目的の捕鯨は16世紀にベル・アイル海峡—ニューファンドランド島とカナダ本土ラブラドル地域との間に位置する海峡—to 到来したバスク人を嚆矢とする。バスク人は12世紀、あるいはそれ以前からビスケー湾において捕鯨に従事しており (Barkham 1984: 515)、鯨類資源を追い求めて大西洋を横断してきたのであった。

ベル・アイル海峡におけるバスク人捕鯨に関する文献の大多数は1548~1588年に集中しており (Barkham 1984: 516)、同時期がバスク人捕鯨の最盛期であったと考えられる。主たる捕獲対象はホッキョククジラとセミクジラであり、同海峡における捕鯨の中心地レッド・ベイ (Red Bay) 一帯において発見、同定された鯨骨の半分以上はホッキョククジラの骨であった (Tuck and Grenier 1989: 6)。

最盛期には年間平均20隻の捕鯨船が活動し、レッド・ベイからは毎年6000~9000バレルの鯨油

(他のラブラドル岸の捕鯨基地を含めると年間1万5000バレル)が欧州に送られた(Barkham 1984: 516, 518)。レッド・ベイにおけるバスク人捕鯨者の最後の越冬期は1603年であり(Barkham 1984: 516)、バスク人捕鯨者はおおよそ半世紀の間にラブラドル岸において1万5000頭かそれ以上の鯨類を捕獲したと推定されている(Grenier 1985: 67)。

17世紀初頭、ベル・アイル海峡におけるバスク人捕鯨が中止に至った原因は、鯨類の過剰捕獲、スヴァールバル諸島における捕鯨の開始、ラブラドル北部からのイヌイットの南下および彼らとバスク人との衝突などとされている(Barkham 1984: 518; Tuck and Grenier 1989: 7)。

バスク人の後、ニューファンドランド島において捕鯨に従事したのがニュー・イングランド地方からの捕鯨船であった。1730年代の終わりにニュー・イングランド地方の捕鯨船がニューファンドランド島に來航し、同島南部のフォーチュン湾、ハーミティッジ湾などで捕鯨に従事、その活動は1807年まで続いた(Dickinson and Sanger 2001: 16)。それ以降、米国の捕鯨船はハドソン湾、デーヴィス海峡、バフィン島における捕鯨の途中にニューファンドランド島に立ち寄るにすぎなくなった(Dickinson and Sanger 2001: 16)。

1840年代にセント・ジョーンズ(St. John's)—現在のニューファンドランドおよびラブラドル州の州都—の2社がニューファンドランド島南岸において小さな捕鯨船を用いて操業、遅れてニューマン社(Newman and Co.)が設立され、同社は1840年代の最盛期に40~50頭の鯨類を捕獲した(Dickinson and Sanger 2001: 16)。これらが地元資本によるニューファンドランド島沿岸における捕鯨の始まりであった。

ニューマン社の後、1876年から1900年にかけてスコットランドの捕鯨・アザラシ漁兼業会社2社がセント・ジョーンズに鯨油・アザラシ油精製施設を建設し、ニューファンドランド人を捕鯨・アザラシ漁船の乗組員として雇用、ニューファンドランド海域においてアザラシ漁を行った後、デーヴィス海峡とバフィン島近海におけるホッキョククジラ捕鯨に出漁した(Dickinson and Sanger 2005: 11-12)。共に油の精製を目的とした当時の捕鯨とアザラシ漁は、初春にニューファンドランド海域の水盤上において誕生するアザラシ類を捕獲し、初夏には水解した北極圏海域において餌を捕食する鯨類を捕獲するという具合に季節差、地域差をうまく利用し、相互に依存しながら発展していったのであった。

本章の最後にアザラシ漁による十分な利益がなかったならば、その後の捕鯨業の発展はなかったであろうという興味深い事実を取り上げておく。1860年代のヤン・マイエン島海域におけるタテゴトアザラシ漁からの利益がノルウェーのアザラシ漁会社の社主スヴェント・フォインの事業意欲を高め、それまで捕獲不可能であったナガスクジラ類用の捕鯨砲の開発を可能にしたのであった(Sergeant 1991: 89)。加えて、フォインは捕鯨業を十分に確立した後もアザラシ漁を継続、捕鯨において損失を出した場合の保険としてアザラシ漁を利用したのであった(Tønnessen and Johnsen 1982: 30)。

シロナガスクジラ1頭の価値がアザラシ300頭から400頭に相当する一方、捕鯨船が必要とする乗組員は15人から30人、これに対してアザラシ漁船が必要とする乗組員は60人であったので

(Tønnessen and Johnsen 1982: 28)、うまくいけば捕鯨の方が確実に儲かる。しかしながら、捕鯨の失敗に備えてリスクを分散させておく必要もある。フォインはアザラシ漁師、鯨捕りとしての腕前だけではなく、事業家としての才能も備えていた人物であった。フォインがアザラシ漁によって儲けていなかったならば、その後のナガスクジラ類用の捕鯨砲および爆発銃の開発はなく、私たちには南氷洋産のおいしい鯨肉を食べる機会もなかったはずである。

### 3. ニューファンドランドおよびラブラドルにおける近代型沿岸基地式捕鯨

#### 3.1. ニューファンドランドおよびラブラドル近代型沿岸基地式捕鯨第1次繁栄期と日本への影響

1896年、捕鯨技術に詳しく、スヴェント・フォインの操業に精通していたセント・ジョーンズ在住のノルウェー人、アドルフ・ニールセンとセント・ジョーンズの企業家たちによって捕鯨合弁会社、カボット・スチーム・ホエーリング社 (Cabot Steam Whaling Co. Ltd.) が設立され、同社は1898年にニューファンドランド島北東岸の小村スヌークズ・アーム (Snook's Arm) に捕鯨施設を建設、操業を開始した (Dickinson and Sanger 2001: 17)。スヌークズ・アームの捕鯨施設は北米における初めての近代的な沿岸捕鯨施設であり (Dickinson and Sanger 2001: 17)、カボット・スチーム・ホエーリング社は1899年には同島南岸のバレーナ (Balaena) に同社2番目の捕鯨施設を建設、1898年91頭、1899年109頭の鯨類を捕獲した (Dickinson and Sanger 2005: 31, 33-34)。

カボット・スチーム・ホエーリング社の成功を受け、ノルウェーの名門捕鯨一族エルフセン家のアンデルス・エルフセンが1901年にニューファンドランド島を来訪、翌1902年、ニューファンドランド島南東部アヴァロン半島東岸アクアフォート (Aquaforte) の土地を購入し、捕鯨施設の建設に着手した (Dickinson and Sanger 2005: 48-49)。アンデルス・エルフセン率いるエルフセン家の捕鯨会社<sup>1)</sup>は1902年、ノルウェーより捕鯨船ハンバー (*Humber*) を導入、捕鯨を開始し、同年108頭、1903年230頭の鯨類を捕獲した (Dickinson and Sanger 2005: 50-51, 56)。

1898年にノルウェーからの近代的な捕鯨技術の導入によって捕鯨船1隻、捕鯨施設1か所により創始されたニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨産業は1904年には捕鯨船10隻、捕鯨施設14か所となり、鯨類1275頭—ナガスクジラ690頭、ザトウクジラ281頭、シロナガスクジラ264頭、その他40頭—を捕獲、鯨油149万2456ガロン、鯨髭2903トン、肥料3511トンを生産し、最盛期を迎えた (Dickinson and Sanger 2005: 73, 151 Appendix 1)。1905年漁期、捕鯨船14隻、捕鯨施設17か所と双方とも最高数になったが、鯨類捕獲数は894頭と初めて減少を記録し、以後は1916年漁期終了後にニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨産業が一時中断されるまで、捕鯨船数、捕鯨施設数、鯨類捕獲数の漸減は続いた (Dickinson and Sanger 2005: 74, 81, 151 Appendix 1)。

このように1916年漁期をもってニューファンドランドおよびラブラドルの近代型沿岸基地式捕鯨は第1次繁栄期を終えた (Dickinson and Sanger 2005: 143)。その操業はニューファン

ドおよびラブラドルの地域経済に大きく貢献したのみならず、日本における捕鯨産業の近代化にも大きな影響を与えたのであった。

明治32（1899）年に設立された日本遠洋捕鯨株式会社が日本におけるノルウェー式捕鯨の嚆矢とされており、同社が明治37（1904）年に増資、商号変更して東洋漁業株式会社となり、さらに明治42（1909）年に東洋漁業株式会社、長崎捕鯨合資会社、帝國水産株式会社など12社が合併して、東洋捕鯨株式会社が設立されるに至っている（東洋捕鯨 1910: 8, 11, 14-16）。

新設された東洋捕鯨株式会社の一翼を担った長崎捕鯨合資会社は明治40（1907）年2月、ノルウェー、ニーランド造船所建造の捕鯨船ハンバー号を購入、これを第二東郷丸と命名した（東洋捕鯨 1910: 252）。このハンバー号こそ上述のニューファンドランド島アクアフォートに設立されたエルフセン家の捕鯨会社において活躍した捕鯨船であった。同船は1906年、日本に売却され、同年10月にニューファンドランド島を出港している（Dickinson and Sanger 2001: 83）。エルフセン家の捕鯨会社の設立者であったアンデルス・エルフセンは日本にハンバー号を含めて2隻の捕鯨船を斡旋、アンデルスの2人の弟たちがこれらの捕鯨船を日本に回航し、彼ら2人は短期間日本において捕鯨業にも従事している（Dickinson and Sanger 2001: 83）。

同様に明治40（1907）年に設立された帝國水産株式会社もノルウェー、アカース造船所より2隻の捕鯨船アバロン号およびフィン号の購入契約をしたが、日本への回航途中にフィン号が紅海において座礁し<sup>2)</sup>、アバロン号のみが日本に到着したのであった（東洋捕鯨 1910: 255）。このアバロン号は後に東洋捕鯨株式会社の捕鯨船アバロン丸となるものである。同船もニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨会社所有の捕鯨船であった（Dickinson and Sanger 2005: 79）。結局、日本への回航途中に座礁したフィン号を含めてニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨船6隻が1904年から1909年の間に新たに設立された日本の捕鯨会社に売却されたのであった（Dickinson and Sanger 2005: 79）。

以上のように日本においてノルウェー式捕鯨、すなわち近代型沿岸基地式捕鯨の導入に際しては、直接ノルウェーからもたらされたものに加えて、ニューファンドランドおよびラブラドル経由のものも少なからずあったのである。このことに言及している日本の捕鯨史研究は現在（2008年）までのところ未見である<sup>3)</sup>。

### 3.2. ニューファンドランドおよびラブラドル近代型沿岸基地式捕鯨第2次、第3次繁栄期

1923年、ノルウェー人捕鯨船長アムンド・アノンセンがニューファンドランドおよびノルウェー資本によってニューファンドランド・ホエーリング社（Newfoundland Whaling Co. Ltd.）を設立、ラブラドル南部のホーク・ハーバー（Hawke Harbour）とニューファンドランド島南岸プレセントィア湾のローズ・オウ・リュウ（Rose-au-Rue）の捕鯨施設を用いてニューファンドランドおよびラブラドルの北部、南部において捕鯨に着手した（Dickinson and Sanger 2001: 95; 2005: 118）。同じく1926年、2人のノルウェー人とセント・ジョーンズの商社の出資によって英国ノルウェー・ホエーリング社（British-Norwegian Whaling Co. Ltd.）が設立され、ホーク・

ハーバーよりも北に位置するグラディ (Grady) に捕鯨施設を設置し、操業を開始した (Dickinson and Sanger 2001: 95; 2005: 116)。

1925年以降1930年まで、毎年の鯨類捕獲数は1925年331頭、1926年360頭、1927年361頭、1928年508頭、1929年386頭、1930年321頭と年間300頭以上記録し (Dickinson and Sanger 2005: 151-152 Appendix 1)、また1927～1928年の鯨油価格も最盛時の1904～1905年と同じぐらいよく、ニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨産業は2度目の繁栄期を迎えた (Dickinson and Sanger 2005: 118, 142)。しかしながら、その後の捕獲数の減少および鯨油価格の低下などに起因して、ニューファンドランド・ホエーリング社と英国ノルウェー・ホエーリング社は1930年漁期終了後から1935年漁期開始までの間、操業一時停止、操業再開を繰り返したのであった (Dickinson and Sanger 2005: 117-118, 120)。

ニューファンドランド・ホエーリング社は2度の清算、再構築の後、1935年にスコットランドの世界的な捕鯨企業クリスチャン・サルヴセン社 (Christian Salvesen) と業務提携し、サルヴセン社が大株主となった (Dickinson and Sanger 2005: 120-121)。1937年、サルヴセン社の子会社、ポーラー・ホエーリング社 (Polar Whaling Company; 以下、PW社) が自社の捕鯨船とニューファンドランド・ホエーリング社のホーク・ハーバーおよびローズ・オウ・リユーにある捕鯨施設を用いて操業を開始し (ニューファンドランド・ホエーリング社は1938年に解体)、同年鯨類を482頭捕獲、成功を収めた (Dickinson and Sanger 2005: 122)。

しかしながら、1940年、英国海運大臣がPW社の捕鯨船4隻を英国本土海岸警備に徴用したため、同社は同年以降1943年まで操業を中止した (Dickinson and Sanger 2005: 123-124)。1945年5月、軍務についていた捕鯨船4隻のうち2隻がホーク・ハーバーに帰還し、PW社は1948年にはホーク・ハーバーにおいて記録となる鯨類461頭を捕獲している (Dickinson and Sanger 2005: 127)。同社は1946年から1951年までホーク・ハーバーの捕鯨施設を用いて鯨類2166頭を捕獲したが、同地の捕鯨施設は1951年10月に閉鎖された (Dickinson and Sanger 2005: 127)。

一方、ニューファンドランド・ホエーリング社の捕鯨船長であったノルウェー人、オラフ・オルセンは同社退社後、1940年に自らの会社、マリーン・オイル社 (Marine Oils) を設立し、PW社から捕鯨船1隻とローズ・オウ・リユーにある捕鯨施設を買い取り、同地で1942年から1944年まで操業した (Dickinson and Sanger 2005: 128)。同社はニューファンドランド管理政府からウィリアムズポート (Williamsport) において捕鯨施設を建設するための土地使用权を取得し、1944年10月、社名をオルセン・ホエーリング・アンド・シーリング社 (Olsen Whaling and Sealing Co. Ltd.) に変更、翌1945年7月からウィリアムズポートにおける捕鯨が開始された (Dickinson and Sanger 2005: 128)。同地における捕鯨は、捕鯨施設が操業を一時停止する1951年10月まで続けられた (Dickinson and Sanger 2005: 129)。このウィリアムズポートの捕鯨施設は後年、大洋漁業によって再興され、日本企業によるニューファンドランド捕鯨事業の中心施設となるのである (4.2.参照)。

1950年、捕鯨はニューファンドランドおよびラブラドルにおける最も価値のある産業の一つに

なり、5月から11月にかけておおよそ700人を雇用し、1人あたり800～1000ドルの稼ぎをもたらした (Dickinson and Sanger 2005: 127)。この1950年を含めて1945年から1951年までがニューファンランドおよびラブラドルにおける捕鯨産業の第3次繁栄期であった (Dickinson and Sanger 2005: 142)。

### 3.3. デイルドにおける捕鯨業の発展

ニューファンランド島南東部トリニティ湾の湾奥部一帯、ニュー・ハーバー (New Harbour)、デイルド (Dildo)、チャペル・アーム (Chapel Arm) などにおいては古くからヒレナガゴンドウの追い込み漁が盛んに行われてきた。

今から150年以上前の19世紀半ば頃、トリニティ湾から少し離れたハーバー・グレース (Harbour Grace) の地元紙に次のような記事が掲載されている。「1週間前にトリニティ湾奥の住民がヒレナガゴンドウの追い込みに成功、400頭以上を捕獲した」(1848年9月)、「ニュー・ハーバーにおいて90～100頭ヒレナガゴンドウを捕獲」(1850年7月)、「ニュー・ハーバーの住民が500頭以上のヒレナガゴンドウを捕獲」(1851年8月) などである (Martin 2006: 106)。当時の教員の給料が半年で15ポンド、これに対して追い込み漁による収入は1頭当たり平均3～4ポンド、住民1人当たりは平均15ポンドになったとあり (Martin 2006: 106)、追い込み漁が寒村部住民の貴重な収入源になっていたことを窺い知ることができる。

当地の追い込み漁とは、餌のイカを追ってトリニティ湾にやってきたヒレナガゴンドウの群れを小舟によって外側から取り囲み、時には石を投げるなどして湾奥部に追い込み、群れごと浜に座礁させて捕獲するというやり方である<sup>4)</sup>。現在でも南太平洋地域のソロモン諸島マライタ島(竹川 1995) などにおいて、ほぼ同様の手法を用いてイルカ類の追い込み漁が行われている<sup>5)</sup>。

この追い込み漁の伝統をもつデイルドの地に1946年、エリス社 (J.C. Ellis and Associates) によってアークティック・フィッシャリー・プロダクツ社 (Arctic Fishery Products Co. Ltd.; 以下、AFP社) が設立された (Dickinson and Sanger 2005: 131; Martin 2006: 104)。同社は当初、タラ肝油などの魚油を精製していたが、やがてカナダ国内他州および地元のミンク、キツネ飼育業者の餌不足を解消するために、ヒレナガゴンドウ、ミンククジラを捕獲し、それらを餌として使用することをめざすようになった (Dickinson and Sanger 2005: 131; Martin 2006: 104)。

小さなモーター・ボート2隻を使用して始まったAFP社の捕鯨事業は、数年後には陸上施設にスリップウェイと大きなボイラーを設置、同時にノルウェー製の捕鯨砲が装備された捕鯨船を所有するまでに至った (Dickinson and Sanger 2005: 132; Martin 2006: 104)。同社において解体処理された鯨肉は上述のようにカナダ国内他州および地元の毛皮動物飼育業者に餌として出荷され、鯨油は米国、英国、およびモンリオールの製油所に搬出された (Dickinson and Sanger 2005: 132)。

AFP社は1959年春にデイルドの鯨肉処理施設を改良すると共に別所に新たな処理施設を設け、5隻の捕鯨船を用いてトリニティ湾、ボナヴィスタ湾において捕鯨、追い込み漁に従事した

(Dickinson and Sanger 2005: 135)。同年、AFP社の処理施設および同社の隣接地に立地し協業関係にあった他社の処理施設においてミンククジラ18頭から鯨肉100万ポンド、ヒレナガゴンドウ546頭から鯨肉30万9000ポンドを生産、それらは地元60飼育場においてミンク6000匹の餌として利用された (Dickinson and Sanger 2005: 135)。

しかしながら、1961年に6262頭あったヒレナガゴンドウの陸揚げ数が翌1962年には150頭と激減、毛皮動物用の餌料不足を引き起こし、1964年に飼育場は約20か所まで減少した (Dickinson and Sanger 2005: 17 Table 1.2, 135)。また、1965年にはウイルス感染症により1匹20~25ドルのミンクが400匹以上も死に毛皮動物飼育業者は大打撃を受けた (Dickinson and Sanger 2005: 135)。このようなことが相まってディルド近隣における毛皮動物飼育業が衰退し、それと共にAFP社の捕鯨事業も縮小されていった。その結果、同社の経営権は1966年、エリス社からニッカーソン社 (H.B. Nickerson) に移ったのであった (Martin 2006: 108)。

このニッカーソン社によるAFP社の経営権の取得がディルドの捕鯨に新たな勢いをもたらし、またニューファンドランドおよびラブラドルにおける捕鯨産業に最後の輝きを与えたのであった。その話は次章において取り上げる。

#### 4. ニューファンドランドおよびラブラドルにおける日本の捕鯨事業

##### —ニューファンドランドおよびラブラドル近代型沿岸基地式捕鯨、最後の輝き—

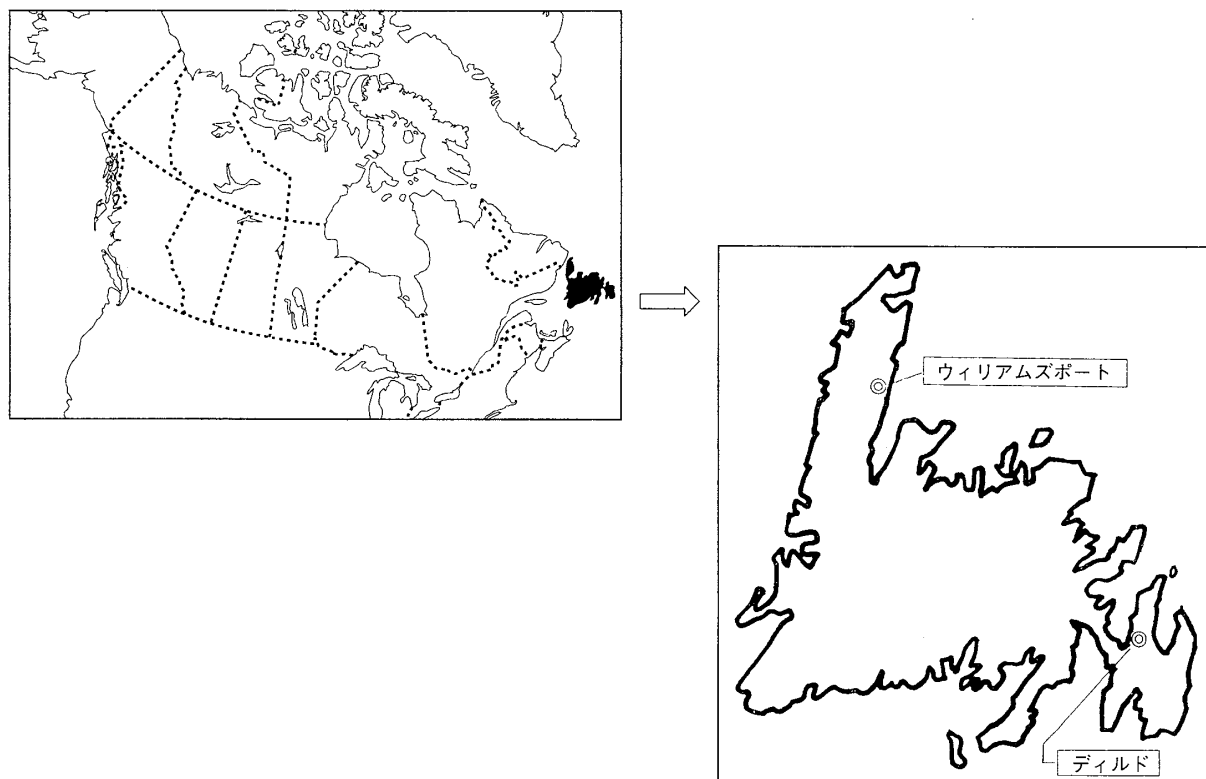
本章においてはニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨産業の発展にかかわった日本の捕鯨会社2社、極洋捕鯨株式会社 (現、極洋株式会社) と大洋漁業株式会社 (現、マルハ株式会社) の現地事業を取り上げる。極洋捕鯨の捕鯨施設はディルドに、大洋漁業の捕鯨施設はウィリアムズポートに設けられた (図1)。第3章において取り上げたように、両地域とも元々、近代型沿岸基地式捕鯨が行われていたところである (3.2.; 3.3.参照)。

##### 4.1. 極洋捕鯨とディルドの捕鯨事業

1965年、極洋捕鯨はカナダ政府よりニューファンドランド島沖合における鯨類資源の調査要請を受け、同年9月中旬より約1か月間事前調査としてトリニティ湾における洋上調査およびディルドにおける陸上調査を実施した (安井 2002: 165-166)。なお、この時の陸上調査には東食ニューヨーク支店の関係者が同行しており (安井 2002: 166)、後にこの東食が鯨肉製品の日本への輸出を担うことになるのである<sup>6)</sup>。

この事前調査を受け、1966年、極洋捕鯨とAFP社は合弁会社、イースト・コースト・ホエーリング社 (East Coast Whaling Company; 以下、ECW社) を設立し<sup>7)</sup>、極洋捕鯨が日本から捕鯨船第17京丸を派遣、5月中旬より12月初旬まで予備操業 (捕獲調査) を実施し<sup>8)</sup>、ナガスクジラ165頭、マッコウクジラ1頭を捕獲 (多藤 1985: 50)<sup>9)</sup>、冷凍鯨肉1579トン、ナガス油715トン、マッコウ油6.5トンを生産した (水産社 1967: 129)。同年、ニューファンドランド島に派遣された

図1 カナダ全土およびニューファンドランド島



極洋捕鯨関係者は第17京丸の乗組員22名、鯨肉製造担当の陸上職員6名、計28名であった（鯨船会 1990; 塩川 1968: 48）。なお、この予備操業に用いられた第17京丸は、冬季係留中にエンジンヘッドが氷結破損したため、廃船となった（荒井 2002: 215）。

第17京丸の乗組員は1966年当時の思い出を筆者に次のように語ってくれた。

1966年のディルドにおける一番の思い出は、とにかくナガスクジラが多くいたということ。ディルドは湾奥部に位置し、ディルドから湾口部までは4～5時間の航海であったが、湾を出るとすぐにナガスクジラを発見できた。出漁したほぼ毎日、2～3頭のナガスクジラを捕獲できた<sup>10)</sup>。

ニューファンドランドおよびラブラドルにおいては、1951年に483頭のナガスクジラが捕獲されたのを最後に、1952年から1965年までの14年間は計111頭しか捕獲されておらず（年間平均8頭未満）（Dickinson and Sanger 2005: 152 Appendix 1）、資源の過剰利用が続いていたのである。よい時期に日本の捕鯨会社が進出していったのであった。

翌1967年、ディルドの捕鯨事業は本格操業となったが、鯨油市況の低迷などの理由から極洋捕鯨は合弁事業の継続を断念し、現地社への技術協力という形で捕鯨船乗組員8名、陸上職員6名、計14名を派遣した（鯨船会 1990; 塩川 1968: 48）。廃船となった第17京丸の代わりに現地のトロール船R.D.エヴァンス（*R.D. Evans*）を捕鯨船に転用、第17京丸の捕鯨砲を積み替えて事業を実



施した（勝田 2002: 211-212）。また、この時期から操業効率を高めるために曳鯨船を用いるようになり、現地船ブルー・ヘイズ（*Blue Haze*）などがチャーターされた（勝田 2001: 212）。

1968年漁期からR.D.エヴァンスに加えて、ウエストホエール8（*Westwhale 8*）—元大洋漁業の捕鯨船第22利丸、前年までカナダ西海岸の捕鯨合弁事業において使用—も捕鯨船として参加するようになったが、極洋捕鯨は引き続き鯨油不況のため陸上施設の指導員3名を派遣するにとどめた（塩川 1968: 48）。従って、同年以降、デイルドの捕鯨事業はAFP社主体により運営されていたことになる。1969年からカナダが商業捕鯨を一時停止する1972年までの4年間は、極洋捕鯨から陸上施設の指導員1名が毎年派遣されただけであった（鯨船会 1990）。

結局、1966年から1972年までの7年間にデイルドの捕鯨施設ではナガスクジラ1186頭、マッコウクジラ19頭、ザトウクジラ10頭、イワシクジラ13頭の計1228頭の鯨類が陸揚げされた（多藤 1985: 51）<sup>11)</sup>。それらの鯨類から生産された冷凍鯨肉は食用として日本に輸出され、また家畜の餌として米国に輸出されたのであった（Dickinson and Sanger 2005: 141）。

カナダが商業捕鯨を一時停止した1972年12月以降もニッカーソン社はAFP社のデイルドの施設を用いて生鮮・冷凍魚の加工とアザラシ生皮加工会社カリノ社（Carino Co. Ltd.）向けのアザラシ油の精製を続け、ニッカーソン社が倒産した1984年以降はカリノ社とフィッシャリー・プロダクツ社（Fishery Products Inc.）がAFP社の施設を購入し（Martin 2006: 108）、現在に至っている。

#### 4.2. 大洋漁業とウィリアムズポートの捕鯨事業

極洋捕鯨がAFP社と合弁によりECW社を設立した1966年、大洋漁業もフィッシャリー・プロダクツ社（Fishery Products Company）との合弁によりアトランティック・ホエーリング社（Atlantic Whaling Company; 以下、AW社）を設立、ウィリアムズポートにおいて放棄されていた捕鯨施設を再興し、捕鯨事業に着手した（Dickinson and Sanger 2005: 141; 徳山 1992: 591）。

AW社は大洋漁業が新たに設立した大洋カナダ有限会社（Taiyo Canada Ltd.）から捕鯨船第15文丸（カナダ名*Fumi*）を傭船、操業開始の1967年当時、同船には日本人7名、カナダ人7名が乗組み、また陸上施設には大洋漁業から職員2名、事業員（鯨肉処理担当）13名が出向し、これに加えてカナダ人事業員が83名であった（徳山 1992: 591-592; 1997: 441）。AW社生産物の販売は加州大洋が取り扱い、冷凍鯨肉は日本と英国（ペット・フード用）に輸出され、鯨油は全量欧州に輸出された（徳山 1992: 592）。日本への輸出に関しては、毎年、漁期の終わりに日本から冷凍輸送船が来航して、漁期中に冷凍保存していた尾肉ほかの高級鯨肉やベーコンなどを持ち帰った<sup>12)</sup>。

ニューファンドランドおよびラブラドル州の州都セント・ジョーンズから自動車でも1時間強の距離にあるデイルドとは異なり、ウィリアムズポートはニューファンドランド島北部、グレート・ノーザン半島の中部大西洋岸に位置し、そこに至る陸路はなく、近隣の町イングリー（Englee）から船で3時間かかるという隔絶地であり、捕鯨のために開発されたところであった。

1967年当時のウィリアムズポートの姿を第15文丸の船長兼砲手は次のように語っている。

基地はこの島の北東岸あり名前はウィリアムズポート [ママ]。地名から想像すると如何にも港町の賑やかさが脳裏に描き出されて来るのだが、実際は全くの陸の孤島。奥行約二・五哩、巾半哩の両岸が切り立った小さい湾で定期的な交通機関は、週一度の巡航船が訪れるだけで陸路は全くなく、僅かの平地に事業所があり、対岸に四家族が住んでいる部落が存在… (吉崎 n.d.)

一方、1967年に捕鯨船に乗組んでいた甲板員は40年後、当時の仕事を筆者に次のように語ってくれた。

連日、基地と漁場の往復であった。半年間は休みなし。基地に捕鯨船を停泊させて寝るようなこともなかった。甲板担当は3人だったので、夜間は2時間ワッチ、4時間休憩の繰り返しであった。基地に戻り、鯨を引き渡す際には、他の仕事もあったので、十分な休憩時間もなかった。ニューファンドランドの一番の思い出は、「苦しかった」「きつかった」である<sup>13)</sup>。

当然のことであるがウィリアムズポートには送電設備はなく、蒸気発電のウインチによって鯨を陸揚げし、冷凍庫としては五大湖地方において小麦運搬船であった船を係留して使用していた (Flynn and Kuehn 2003)。同地における操業は6月から11月ぐらいまでで、11月にもなると凍てつくような寒さとなり、労働が困難となった (Budgell 2001: 138)。11月末には湾内に流れ込んでいる川から氷が流されてきて、冬季には湾内に1 mぐらいの氷が張るまでになった<sup>14)</sup>。人里離れた隔絶地、厳しい自然環境の中で働いていた人々の往時が偲ばれる。

1967年7月、当地における捕鯨事業の立ち上げに尽力された大洋漁業関係者2名が乗った水上飛行機が離水直後に墜落して搭乗者4名全員が亡くなれるという不幸な出来事もあった (徳山 2001: 786)<sup>15)</sup>。異国の地において命を落された方々はさぞ無念であったであろう。改めてご冥福をお祈りしたい。

結局、AW社は1967年から1972年の間においてナガスクジラ1228頭他、計1246頭を陸揚げし<sup>16)</sup>、鯨肉1万4411トン、鯨油6999トンを生産している (徳山 1992: 593)。

ウィリアムズポートにおいて活躍した捕鯨船第15文丸は、カナダが商業捕鯨を一時停止した後、大洋カナダ有限会社からセント・ジョーンズの鋼材商社スティーヴンズ社 (J.W. Stephens Iron and Metal Co.) に売却され、1976年頃、かつて捕鯨が行われていたプレゼンティア湾にあるロング島ハーバー・ブフエット (Harbour Buffet) 近くにおいて廃船処理された (Flynn and Kuehn 2003)<sup>17)</sup>。また、ウィリアムズポートの捕鯨施設も放棄され、朽ち果てるがままである<sup>18)</sup>。現在、同地にはホエール・ウォッチング、バード・ウォッチング用のコテージが1軒建つのみで

ある<sup>19)</sup>。

本章において取り上げた1966年から1972年までの極洋捕鯨、大洋漁業と現地企業との合併による捕鯨事業がニューファンドランドおよびラブラドルにおける捕鯨産業の第4次繁栄期であった (Dickinson and Sanger 2005: 142)。

1972年12月、カナダによる商業捕鯨の一時停止決定によって、1898年から1972年までの間において近代型沿岸基地式捕鯨によってナガスクジラ1万2863頭ほか計1万9632頭の大型鯨類を捕獲し (Dickinson and Sanger 2005: 151-152 Appendix 1)<sup>20)</sup>、1948年から1971年までの間に追い込み漁によってヒレナガゴンドウ5万4455頭陸揚げした (Dickinson and Sanger 2005: 17 Table 1.2) カナダの商業目的の捕鯨は終焉を迎えたのである。

## 5. おわりに

1972年12月にカナダにおいて商業捕鯨の一時停止決定がなされた背景には「反捕鯨運動の世論」 (多藤 1985: 51) があったのは事実であろう。同年は国連人間環境会議において商業捕鯨の10年間の一時停止勧告案が採択された年でもあった。

しかしながら、カナダにおいては1800年から2006年までの間にタテゴトアザラシを中心とするアザラシ類が4441万頭以上商業目的により捕獲されてきた歴史がある (浜口 2008: 148)。1972年、タテゴトアザラシが12万9883頭捕獲されているのに対して (IFAW 2007: 16 Appendix I)、鯨類捕獲数はナガスクジラ265頭、ミンククジラ97頭ほか計366頭である (Dickinson and Sanger 2005: 152 Appendix 1)。2006年、鯨類捕獲数はもちろんゼロであるが、タテゴトアザラシは35万4344頭捕獲されている (IFAW 2007: 16 Appendix I)。このタテゴトアザラシの商業利用からわかるようにカナダは多くの欧米諸国とは異なり、海洋哺乳類の致死的・消費的利用を可としている国である。

では、なぜアザラシ類の致死的・消費的利用は「可」となり、鯨類の致死的・消費的利用は「否」となるのであろうか。タテゴトアザラシの捕獲はその生皮およびなめし皮を輸出することによって成り立つ産業であり、それは1972年当時も現在もかわりはない。捕鯨は鯨肉を日本に、鯨油を欧州に輸出することによって成り立つ産業であった。双方とも、輸出依存型産業であることに違いはない。

結局、アザラシ漁と捕鯨の可否の違いはそれが地元にもたらす経済的貢献の違いにあるのであろう。アザラシ漁に従事する漁民の年収におけるアザラシ漁からの収入に関して、ニューファンドランドおよびラブラドル州漁業養殖省は「2006年、少なくとも7沿岸コミュニティがその勤労所得の15~25%をアザラシ漁から得ており、37以上の沿岸コミュニティがその勤労所得の5%以上をアザラシ漁から得ている」<sup>21)</sup>としている。1972年当時の漁民の年収におけるアザラシ漁が占める割合についての正確な数字はないが、今日においても漁業以外の産業が乏しい小寒村の36年前の状況を考えてみれば、少なくともアザラシ漁からの収入の意義は今日以上に大きかったこと

は確かである。

1972年当時、カナダにおいて商業捕鯨が行われていたのはニューファンドランドおよびラブラドル州のディルド、ウィリアムズポートとノヴァ・スコシア州のブランドフォード (Blandford) の3地域だけであった (Dickinson and Sanger 2005: 14, 177 note 82)。そのうち、ウィリアムズポートは捕鯨のためにのみ再興されたいわば人工的な居住地である。もちろん、捕鯨が行われないうちに人はいない。ディルドの捕鯨施設において雇用されていた地元民は、例えば3年間働いていた人は2年分の賃金に相当する補償金、2年間働いていた人は1年分の賃金に相当する補償金という形の補償金をもらい捕鯨産業から離職していった (Dickinson and Sanger 2005: 213-214 note 74)。

結局、捕鯨産業は廃止しても多くの地元民にはほとんど経済的影響を与えない存在であったのであり、カナダ政府としても反捕鯨の世論を敵に回してまで存続を図る必要はなかったのである。こうして、日本の捕鯨産業の勃興期と繁栄期にかかわりのあったニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨産業は幕を閉じたのであった。

それから36年、ニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨産業に関わる事柄は関係者の記憶、文献記録、そして産業遺跡の中に未だ残っている。産業遺跡はやがて消え去る運命なのかもしれないが、ニューファンドランドおよびラブラドルの捕鯨産業が日加双方の地において記憶と記録の中に永くとどまること、またそのために本稿が多少なりとも貢献することを願って筆をおきたい。

#### [付記]

本稿の基礎となった2004年8月のニューファンドランドおよびラブラドル州における現地調査は園田学園女子大学在外研究員として在外研究旅費の支給を受け、カナダ、モントリオール市のマギル大学に客員教授として滞在中に実施した。また、2007年8月の現地調査は平成18年度日本学術振興会・科学研究費補助金 (基盤研究A課題番号15251012「先住民による海洋資源の流通と管理」[研究代表者・岸上伸啓国立民族学博物館教授]) の支給を受け実施した。関係各位に記して謝意を表しておきたい。

#### 注

- 1) エルフセン家の捕鯨会社の名称について、テネッセンとヨンセンは「アトランティック・ホエール・マニュファクチャリング社」(Atlantic Whale Manufacturing Co.) としており (Tonnessen and Johnsen 1982: 104)、一方、ディキンソンとサンガーは旧著 (2001) においては「アトランティック・ホエーリング・アンド・マニュファクチャリング社」(Atlantic Whaling and Manufacturing Co. Ltd.) としている (Dickinson and Sanger 2001: 17)。しかしながら、ディキンソンとサンガーの新著 (2005) では「アトランティック・ホエーリング・アンド・マニュファクチャリング社」はエルフセン家とは関係のない他の捕鯨会社とされ (Dickinson and Sanger 2005: 61)、エルフセン家の捕鯨会社には便宜的に「アクアフォート・ホエーリング社」(Aquaforte Whaling) の名称が付されているだけである (Dickinson and Sanger 2005: 153 Appendix 2)。
- 2) フィン号は1907年1月4日、日本に向けてセント・ジョーンズを出港し、大西洋を横断、地中海、スエズ運河を経て紅海に入ったが、同年2月25日、ジェッダ付近において座礁し、4人の乗組員が亡くなったのであ

- った (Dickinson and Sanger 2005: 193 note 49)。
- 3) 日本の捕鯨史研究に関する著作において、近代型捕鯨の導入期におけるノルウェーからの捕鯨船、捕鯨道具の輸入、およびノルウェー人砲手の雇用については言及されているが (例えば、森田 1994: 326-329; 中園 2001: 182-189; 高橋 1992: 78-82; 渡邊 2006: 30-37; 山下 2004: 171-175)、ニューファンドランドおよびラブラドルを経由したノルウェー建造の捕鯨船の輸入については触れられていない。僅かに、日本捕鯨株式会社設立時に設立発起人の一人がニューファンドランド島におけるノルウェー式捕鯨を実見したとの記述があるだけである (山下 2004: 172)。
  - 4) トリニティ湾奥部サウス・デイルド (South Dildo) にある「捕鯨・アザラシ漁博物館」(Whaling and Sealing Museum) において、1960年代に撮影されたヒレナガゴンドウの追い込み漁のビデオ放映がなされている。筆者は2004年8月、2007年8月の2回、同博物館を訪問し、管理者から説明を受けた。同管理者 (かつては捕鯨船乗組員としてミンククジラ、ヒレナガゴンドウの捕鯨に従事) によれば、近年はヒレナガゴンドウの餌となるイカが少ないため、ヒレナガゴンドウもトリニティ湾奥部までは回遊してこないとのことであった。
  - 5) 明治時代半ば頃まで、沖縄県名護湾一帯でもほぼ同様の追い込み漁によってヒレナガゴンドウと近縁種のコビレゴンドウ (マゴンドウ) ほかの鯨・イルカ類が捕獲されていた (浜口 2005a)。また、現在でも和歌山県太地町においては動力船と鉄管打撃音を用いたコビレゴンドウ (マゴンドウ) ほかの鯨・イルカ類の追い込み漁が行われている (浜口 2005b)。
  - 6) 2007年8月に面談したAFP社の元デイルド事業所長から東食が鯨肉製品の日本への輸出を担当していた旨の話をお伺いした。
  - 7) ディキンソンとサンガーは大洋漁業とAFP社が合併によりECW社を設立したとしているが (Dickinson and Sanger 2005: 141)、この大洋漁業は極洋捕鯨の誤りである。また、同じ箇所において大洋漁業が捕鯨船第17京丸を日本から派遣したとしているが (Dickinson and Sanger 2005: 141)、これも極洋捕鯨の誤りである。
  - 8) この捕獲調査にカナダ政府海洋哺乳類調査官として参加していた人物が、後に日本にやってきて作家として成功するC.W.ニコルである (安井 2002: 167; ニコル 2001: 10, 48)。
  - 9) 多藤 (1985: 50) による鯨類捕獲数の出典は不明。これに対して国際捕鯨統計に基づくディキンソンとサンガーによる1966年のデイルドにおける鯨類捕獲数はナガスクジラ164頭、マッコウクジラ2頭である (Dickinson and Sanger 2005: 140 Table 10.3)。
  - 10) 2007年10月に面談した第17京丸乗組員のお話による。
  - 11) ディキンソンとサンガーによる統計では同期間のデイルドにおける鯨類捕獲数は、ナガスクジラ1158頭、マッコウクジラ11頭、ザトウクジラ20頭、イワシクジラ12頭の計1201頭である (Dickinson and Sanger 2005: 140 Table 10.3)。なお、多藤の統計には1967年のナガスクジラ陸揚げ数の中に他社 (後述のAW社) によるデイルドの施設への陸揚げ分27頭が含まれており (多藤 1985: 51)、それを減じればナガスクジラの陸揚げ数は1159頭、計1201頭となる。
  - 12) 2007年11月に面談した第15文丸乗組員のお話による。
  - 13) 注12)
  - 14) 注12)
  - 15) この墜落事故により亡くなられた大洋漁業関係者2名は以前に南極大陸近くのサウス・ジョージア島における捕鯨事業にも参加されていた (大貫 2002: 172)。鯨を追って、東奔西走していたのである。
  - 16) ディキンソンとサンガーによる統計では同期間のウィリアムズポートにおける鯨類捕獲数は、ナガスクジラ1230頭、ザトウクジラ15頭、イワシクジラ4頭の計1249頭である (Dickinson and Sanger 2005: 140 Table 10.4)。
  - 17) フリンとクーエンの報告文の中に2001年頃撮影の錆びつきボロボロになった第15文丸の写真が掲載されている (Flynn and Kuehn 2003)。
  - 18) ディキンソンとサンガーの著書の中に崩壊途上にあるウィリアムズポートの捕鯨施設の写真 (1994年撮影) が3枚掲載されている (Dickinson and Sanger 2005: 144 Illustrations 11.1, 11.2, 11.3)。
  - 19) ウィリアムズポート・ツアーズ社 (Williamsport Tours) のホームページによる。  
6 June 2007 <<http://www.williamsport.ca/lodge.htm>>.
  - 20) 同じ本の15頁においては捕獲数合計1万9643頭とされている (Dickinson and Sanger 2005: 15)。
  - 21) DFA (Department of Fisheries and Aquaculture, Government of Newfoundland and Labrador), Sealing

Industry: The Economic Importance.

29 May 2007 <<http://www.fishaq.gov.nl.ca/sealfactsheet/eco.htm>>.

## 文献

荒井洋治

2002 「ニューファンドランド基地捕鯨の思い出」磯泰・細萱安彦・眞野季弘・渡邊公郎 [編] 『くじらの海とともに—極洋のくじらとり達の物語—』 215-221頁。

Barkham, Selma Huxley

1984 The Basque Whaling Establishments in Labrador 1536-1632: A Summary. *Arctic* 37(4): 515-519.

Budgell, Nathan

2001 *A Newfoundland Son*. Bloomington: 1st Books Library.

Dickinson, Anthony B. and Chesley W. Sanger

2001 *Norwegian Whaling in Newfoundland: The Aquaforte Station and the Ellefsen Family, 1902-1908*. Research in Maritime History, No. 20. St. John's: International Maritime Economic History Association.

2005 *Twentieth-Century Shore-Station Whaling in Newfoundland and Labrador*. Montreal and Kingston: McGill-Queen's University Press.

Flynn, Dennis and Axel Kuehn

2003 Going Deeper: More than Meets the Eye. (Last Modified August 1, 2003.)

24 February 2005 <<http://www.busi.mun.ca/flynn/deeper.htm>>.

鯨船会

1990 「海外基地捕鯨V. ニューファンドランド捕鯨」『捕鯨船』第9号。

Grenier, Robert

1985 Excavating a 400-year-old Basque Galleon. *National Geographic* 168(1): 58-68.

浜口 尚

2005a 「沖縄県名護のピトゥ漁—その歴史、現況および課題について—」『和歌山地理』 25: 64-70.

2005b 「海の蛮人騒動記—シー・シェパードによる鯨・イルカ類追い込み漁仕切り網切断事件をめぐる—」『園田学園女子大学論文集』 39: 41-52.

2008 「カナダ、ニューファンドランドおよびラブラドル州における商業アザラシ漁—タテゴトアザラシの利用、管理、流通に関する一考察—」岸上伸啓 [編著] 『海洋資源の流通と管理の人類学』（みんぱく実践人類学シリーズ3）東京：明石書店、147-171頁。

IFAW (International Fund for Animal Welfare)

2007 *Seals and Sealing in Canada 2007*. Guelph: IFAW, 17pp.

勝田順介

2002 「私の鯨に関する回想記」磯泰・細萱安彦・眞野季弘・渡邊公郎 [編] 『くじらの海とともに—極洋のくじらとり達の物語—』 209-214頁。

Martin, Willis P.

2006 *Two Outports: A History of Dildo-New Harbour*. St. John's: Flanker Press.

森田勝昭

1994 『鯨と捕鯨の文化史』名古屋：名古屋大学出版会。

中園茂生

2001 『くじら取りの系譜—概説日本捕鯨史—』（長崎新聞新書001）長崎：長崎新聞社。

ニコル、C.W.

2001 『海洋記』（竹内和世他訳）東京：河出書房新社。

大貫哲夫

2002 「サウスジョージア捕鯨の思い出」磯泰・細萱安彦・眞野季弘・渡邊公郎 [編] 『くじらの海とともに—極洋のくじらとり達の物語—』 169-174頁。

Sergeant, David E.

1991 *Harp Seals, Man and Ice*. Canadian Special Publication of Fisheries and Aquatic Science 114. Ottawa: Fisheries and Oceans Canada.

塩川 健

1968 「ニューファンランドだより」『うしお』（極洋捕鯨株式会社社内報）第61号、48-51頁。

水産社〔編〕

1967 『水産年報』（1967年版）東京：水産社。

高橋順一

1992 『鯨の日本文化誌—捕鯨文化の軌跡をたどる—』京都：淡交社。

竹川大介

1995 「イルカが来る村—ソロモン諸島—」秋道智彌〔編著〕『イルカとナマコと海人たち—熱帯の漁撈文化誌—』  
東京：日本放送出版協会、89-114頁。

多藤省徳〔編著〕

1985 『捕鯨の歴史と資料』東京：水産社。

Tønnessen, J.N. and A.O. Johnsen

1982 *The History of Modern Whaling*. Translated from the Norwegian by R.I. Christophersen. Berkeley and  
Los Angeles: University of California Press.

徳山宣也〔編著〕

1992 『大洋漁業・捕鯨事業の歴史』自費出版。

1997 『大洋漁業 総合年表』（私家版）自費出版。

2001 『年表で綴る大洋漁業の歴史』（私家版）自費出版。

東洋捕鯨株式会社〔編〕

1910 『本邦の諾威式捕鯨誌』（復刻版『明治期日本捕鯨誌』山口県徳山市：マツノ書店、1989年）

Tuck, James A. and Robert Grenier

1989 *Red Bay, Labrador: World Whaling Capital A.D. 1550-1600*. St. John's: Atlantic Archaeology Ltd.

渡邊洋之

2006 『捕鯨問題の歴史社会学—近現代日本におけるクジラと人間—』東京：東信堂。

山下渉登

2004 『捕鯨Ⅱ』（ものと人間の文化史120-Ⅱ）東京：法政大学出版局。

安井敬一

2002 「外国基地捕鯨事業の事前調査」磯泰・細萱安彦・眞野季弘・渡邊公郎〔編〕『くじらの海とともに—極洋  
のくじらとり達の物語—』162-168頁。

吉崎克見

n.d. 「東カナダ捕鯨」（鯨船会『捕鯨船』第9号、1990年所収）